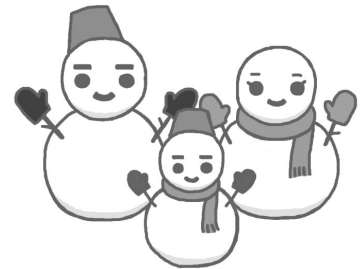




も く じ

組織図・ボランティア募集	2
特集「野宿している人と私たち」	3
特集の意図	3
会員・職員座談会	4
ワカモノと野宿	8
今、知りたいことが出ている本『<野宿者襲撃>論』	9
各グループ活動紹介「2006年をふりかえって」	10
あの人に会いたい！・増田征子さん	14
おしらせ	16



はじめに

神戸YWCA地域活動委員会は、1995年の阪神・淡路大震災を契機に神戸YWCAの中に生まれた9つのボランティアグループの横の連携を深め、神戸YWCAの考える地域福祉～ひとりひとりが存在そのものを大切にされる地域社会作り～を実現するために活動している委員会です。

各グループの活動について会員内で情報を共有し協力し合あうだけでなく、神戸YWCAにつながるボランティア同士の交流、内外への各活動の情報の発信などもおこなっています。

組織図・活動紹介
一緒に活動して下さる方を大募集しています!!!



グループ名	活動紹介・ひとこと	活動日
高齢者のサポート		
わいわいランチ	一人暮らしの高齢者世帯に手作りのお弁当をお届けしています。盛りつけや配達など得意なところで力を発揮してください。	毎週月 ～金曜日 10:00～
わいわい亭	高齢者の方対象の会食サービスです。食事の準備や話し相手など、皆さんと楽しいひとときを過ごしてください。	毎週水曜日 10:30～ 14:00
わいわいデイルーム	食べて語って歌って手を動かします。お話やゲーム、手芸など、楽しく活動しています。	毎週火曜日 11:00～ 15:00
弓の木 歌の集い	灘区弓ノ木南市営住宅の高齢者による歌の集い。	
子どもと家族のサポート		
そらとぶうさぎ	しょうがいをもつ子どもと家族のためのフリースペース。みんなで遊んだり、お出かけしたりしています。ぜひ一度きてみませんか？	第1土曜日
子育て支援プロジェクト	子育て中のお母さん、お父さんそしてその子どもを社会のみんなで支援していきます。	
ちゃいやあらんど	子どもと家族のためのフリースペース。つくろう会や音楽セッションもあります。ぜひ参加してください。	毎週木曜日 10:30～ 15:00
野宿している人の支援		
夜回り準備会	野宿している人の支援。灘区・東灘区で野宿している人を訪問してお話をうかがっています。参加してみませんか？	第2・第4 土曜日 18:00～

YWCA (Young Women's Christian Association) は、キリスト教を基盤に世界中の女性が言語や文化の壁を越えて力を合わせ、女性の社会参画を進め、人権や健康や環境が守られる平和な世界を実現する国際 NGO です。1855 年英国で始まり、今では日本を含み 120 あまりの国と地域で、約 2500 万人の女性たちが活動しています。

特集・野宿している人と私たち

野宿したくない人が野宿しなくてすむように、
野宿せざるをえない人の人権がそこなわれないように

神戸 YWCA では野宿している人 いわゆる「ホームレス」の問題に取り組んできた。その取り組みにあたってのスタンスは「野宿したくない人が野宿しなくてすむように、野宿せざるをえない人の人権がそこなわれないように」と表現される。

私たちが野宿の問題に出会ったのは 12 年前である。1995 年の阪神・淡路大震災のとき、多くの人が一瞬にして住む家を失った。様々な理由で避難所に入れなかった人々は、倒壊した自宅、公園や空き地のテント、あるいは自動車の中で避難生活を送っていた。震災後、そうした場所へ神戸 YWCA 救援センターのボランティアは物資や情報を届けて回っていた。

ある公園のテント村を訪問していたとき。そこの住民から「向こうのテントの住人には物資を配らなくてよい」と言われた。「向こうのテント」に暮らしている人は、震災前から住むところを失っていた人、「ホームレス」だった。この件を救援センター内で議論した。そして「震災によって家を失った人であろうが、そうでない理由で家を失った人であろうが区別する理由がない」として、その後も同じように対応した。このときの決定の延長に、今の私たちの野宿している人への取り組みがある。

神戸 YWCA 地域活動委員会は、震災の救援活動のために成立した「救援センター」の後身である。野宿している人への支援は、この委員会の中の「夜回り準備会」が主に行っている。夜回り準備会では、その 1 年の活動内容などを報告書にまとめている。現在、夜回り準備会で取り組んでいること、取り組みの中で出会った野宿している人の状況、国や自治体の施策の問題点などがこの報告書の中で指摘されている。この報告書は神戸 YWCA のサイトからダウンロードできるので、是非にご一読願いたい(<http://www.kobe.ywca.or.jp/NOJUKU/yomawari2005.pdf>)

この文書を書いている今、大阪市の長居公園では野宿している人への行政代執行がまさに行われようとしている。神戸でも様々に口実をつけた「追い立て」とその後の工事によって、野宿ができる場所が減っている。しかしながら、路上で寝ざるを得ない状況に追い詰められる人の数は、一向に減っていない。そんな中で追い立てが進むことは、追い詰められた人々の路上死を増やすことに直結する。

行政によるそうした追い立てを、私たちは支持していないだろうか。テントを建てて暮らしている人は、自分も苦労して生活している「居宅」の人々が支持する国や自治体の施策によって、追い立てられ、路傍に倒れることになると言えないだろうか。今回の特集は「野宿している人と私たち」である。神戸 YWCA 地域活動委員会は「ひとりひとりが存在そのものを大切にされる地域社会作り」をスローガンに掲げる。しかし私たちは「ホームレス」をこの「地域社会作り」より除外して考えてしまいがちではないか。この特集や、夜回り準備会の活動報告所を読んで、この問題について考えてもらえれば、幸甚である。(藤室 玲治)



神戸YWCA夜回り準備会では、野宿者の権利擁護のために「夜回り」活動を行っていますが、これは同時に「居宅」の人が野宿している人と出会う場でもあります。そこで居宅の私たちが受ける衝撃は「野宿している人と私たち」の距離そのものです。それぞれの「衝撃」を話し合いました。

野宿している人と私たち

神戸YWCA 会員・職員座談会

神戸YWCA夜回り準備会では、野宿している人 いわゆる「ホームレス」を月に2回訪問する活動を続けていますが、今日はそこで長く活動しているメンバーではなく、夜回り活動に数度だけ参加した神戸YWCAの職員、また今年になってから活動に参加するようになった「新人」といったメンバーを中心に話をしようと思います。いわゆる「ホームレス」との出会いで、どんなことを感じたのか、鮮度の高い話を聞きたいと思うからです。まず、掛橋さんからお願いします。

「ホームレスのおじさんは怖くない？」と娘に聞くと「なんで怖いって言うの？」と返されました。これには答えられなくて。

掛橋智佳子 神戸YWCA職員。おもに労務を担当。9歳になる娘の母。野宿のことに関心はあるが、そう度々、土曜の晩に家庭を空ける訳にもいれない。最近娘とともに夜回りに参加してくれた。

掛橋：最初の夜回りは1年ほど前、韓国から来たゲストの方が夜回りに参加されるということで、その通訳として参加しました。2回目は、つい先日、娘と一緒に行かせてもらいました。この座談会があるからということもあったのですが、1度、娘とまわりたいと思っていたんです。「あしがらさん」¹を娘と見る機会があり、そのときに「ホームレスのおじさんは怖くない？」と娘に聞くと「なんで怖いって言うの？」と返されました。これには答えられなくて。そんなこともあって、私が余計なことを言うよりも、実際に彼女を野宿している人に会わせた方がいいなと思ったんです。

昔は野宿している人のいる公園で子どもを遊ばせることができないと思っていました。神戸YWCAのある会員さんにそう言うと「なんで話もしないで決めつけるの？」とか「まず、喋ってみないと」と言われて。でもまったく理解できませんでした。そもそもまず喋るのが怖いのに、何を言っているんだろうという感じで。しかし、夜回りに参加して、頭ではなく実感として、そのことがストーンと落ちました。

1 「あしがらさん」。東京・新宿で20年以上も路上生活を続ける男性「あしがらさん」を3年にわたって撮影したドキュメンタリー。監督・撮影は飯田基晴。2002年制作。

はじめて夜回りしたときに出会った人が、すごくステキな人だったのも大きいです。その人は夜回りに参加している中学生の男の子とすごく楽しそうに話をしていたんです。普通の人(語弊がありますけど)といろんなステキな出会いがあるけれど、それと同じような出会いが夜回りの中にあるというのは、私にとってはすごく衝撃的でした。

村川：まず話す、ということさえも怖いと思っていたというのは、どうしてです？

掛橋：野宿している人だからというよりは、まったく知らない、わからない相手であるからかな。話しかけるのは、かなりハードルが高いと感じていました。

自分の家庭もけして裕福ではなかった。それでかえって、野宿している人に対して「ああいう風になるな！」というのがすごく強くあった。

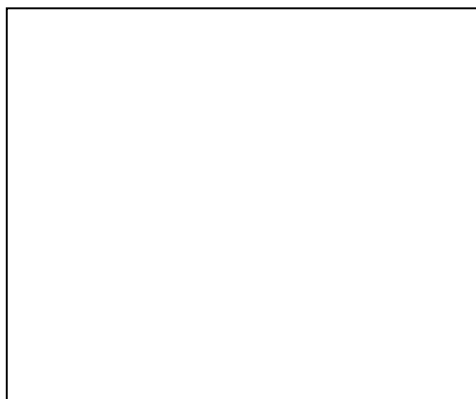
松本：それはとても良く分かる。私も同じような気持ちだった。見知らぬ人に声をかけるのが怖かったので、地域活動委員会の委員長になってもしばらくは夜回りの活動には参加していませんでした。だけど、やはり参加してみないと「夜回り準備会」のことが分からない。それでまわってみよう。

実際にまわると決めるときには、もちろん話をする覚悟はして、あとは自分の差別意識で彼らを傷つけないかが心配だった。

自分の家庭もけして裕福ではなかった。それでかえって、野宿している人や生活保護で暮らしている人に対して「ああいう風になるな！」というのがすごく強くあった。だから“彼ら”と“自分”の線引きをしたかったのかな。そういう怖さがあったのだと思う。

実際に夜回りをした印象として、やさしいというか、物腰がやわらかい人が多いなと思った。もっといろいろ話してくれればできることがあるかもと思う。何ができるだろうと考えながらまわっている。

夜回りを始めてから、友だちが「ホームレスは怖い」と言っていて、それに対して「どうして？」と聞けなかった。どうしてそう思うのかという話をできるようになりたい。



松本光代 神戸YWCA 会員、地域活動委員会委員長。「そらとぶうさぎ」の活動から神戸YWCAに入る。2006年5月から「夜回り準備会」の活動にも定期的に参加。

「あ、フツーの人やん」と思っちゃたんですね。裏を返せば、自分は野宿している人のことを「フツーの人」やとそれまで思っていなかった。

村川：神戸大学に入学して、まだ大学のこともよく分からないうちに、「灘チャレンジ」²という祭りでいう風刺劇に役者として出演することになって、そのテーマが「ホームレス」だったんです。それで演じるテーマを知るために神戸YWCAの夜回りに参加しました。

2 阪神・淡路大震災で救援ボランティア活動を行った学生団体・市民団体の有志ではじめた地域のお祭り。毎年6月第1日曜日に灘区の都賀川公園で開催される。神戸YWCA夜回り準備会は2001年から参加し、野宿の問題をアピールしている。2004年6月には「ホームレス」がテーマの風刺劇が上演された。

まあこのご時世だし、野宿もするやろう、く
らしい認識は参加する前からあって、偏見は持
ってないつもりだったんですね。それが実際に
まわってみたら「あ、フツーの人やん」と思っ
ちゃたんです。裏を返せば、自分はそれまで野
宿している人のことを「フツーの人」やと思っ
ていなかったということ。そんな自分に衝撃
をうけたんです。それで「もっとおっちゃん
のことを知ろう」と思って、夜回りに参加し続
けることにしました。するとまた意識の変化があ
って、自分でそれに気がついたのは、夜回りを
始めて1年半ほど経ってからです。



村川奈津美 神戸YWCA 会員。神戸大学発達科学
部3年生。新生のときに灘チャレンジの風刺劇
の役者となり、それがきっかけで夜回りに参加
するようになる。現在、夜回り準備会の共同代表。



岸洋平 夜回り準備会ボランティア。神戸大学法
学部1年生。村川さんとは神戸大学のボラン
ティアサークル・学生震災救援隊の先輩・後輩の
関係。入学後まもなく、夜回りに参加した。

2006年の大阪での行政代執行³のことがテレ
ビの討論番組で議論されているのを見ていたん
です。その中で出演者のひとりが「だからね、
ホームレスは私たちとは別の人間なんですよ」
と言って、その言葉がショックで泣いてしまっ
て。泣きながら「なんで自分は泣いているんだ
ろう」と考えると、自分にとって「おっちゃん
ら」が家族や友達みたいに大事に思える人にな
っていたみたいで、その人たちが「別の人間」
と言われたことが許せなかったんですね。今で
は「自分と別の人間だ」という人におっちゃん
らのことを知ってもらいたくて、それで夜回り
を続けています。

橋の下や壁の後ろに、見えないよう
に、隠れるように定住している人が
いることに驚きました。

岸：オレは新生のときに、よく分からないま
ま誘われて夜回りに参加したんです。地元が岡
山で、岡山城近くの高校に通っていたので、お
城の公園を通るんです。そこで朝、ベンチで大
勢の人が寝ていて、昼間はワンカップを飲んで
いるという状況を3年間、自転車から見ていま
した。リヤカーとか自転車で移動しながら寝て
いる感じでした。オレの弟の友達が、そこで寝
ている人にエロ本を見せてもらったり、そんな
話は聞いたことがあったけれど、直接に話をし
たことはなかったです。

岡山では、寝ている人は結構、人目に触れや
すい感じだったんです。それで、神戸で最初の
夜回りに参加して、橋の下や壁の後ろに、見え
ないように、隠れるように定住している人がい

³ 2006年1月30日、大阪市の大阪城公園と鞠(う
つぼ)公園で、野宿している人のテント村が行政代
執行により強制排除された。詳しくは『神戸YWCA
夜回り準備会2005年度年間活動報告書』第4章を
参照されたい。

ることに驚きました。その後いろいろ説明を受けて、岡山大でオレが見ていたホームレスも、生活保護を受けてアパートに住むのはハードルが高いとか、医療が受けられないなどの、そういう問題があるんだということが分かりました。

社会の矛盾を、若い人が野宿の問題で感じていると思った。野宿との出会いがあるのは、神戸YWCAにとって、すごく大事なこと。

川辺：先ほど「野宿している人に話かけるのが怖い」という話がでましたけど、私なんかはそうやって周囲が野宿している人を無視し続けたあげく、襲撃が起こったりすることこそが怖いと思います。私にとって、まず横浜の浮浪者襲撃事件⁴の衝撃が大きいのです。その後は震災のときの神戸YWCA 救援センターでの活動を通じて、野宿している人の問題と出会いました。

こういう問題が続く世の中は、よくないです。だけど、そういう問題への取り組みを若い人がやっているということが、すごくうれしいし、応援したい、と思っています。この間、夜回りに参加して、今の社会の矛盾を若い人が野宿の問題で感じていると思った。野宿との出会いがあるのは、神戸YWCAにとって、すごく大事なことだなと。

村川：今の川辺さんの話を聞いて思ったんだけど、大学に入って、いっぱいいろんな人と会いたいという気持ちだったときに、一番最初に出会ったのがおちゃんだったことはすごく大きいと思う。幸せだったと思う。

テレビの中の発言で「私たちとは別の人」という発言で泣けたのは、やっぱり具体的に野宿

している人と出会っていたからだと思う。



川辺比呂子 神戸YWCA 職員、総幹事代行。学院外国語科担当。夜回りのことには関心があるものの、土曜日には外国語科の子どものクラスがあるので難しかったが、2006年夏に参加してくれた。

川辺：ひとつひとつは小さいつながりだろうけど、例えば相談を受けたことについて行政に訴えていく⁵ことができるのは、野宿している人との関係を夜回りがちゃんと作れているからだと思う。

村川：そう、私たちのしていることは、関係性の担保だと思う。自分がその人といることので一つの世界をつくりだしているような。まずその人の世界を見せてもらう。そこに一緒にいさせてもらう。そこから、一緒に世界をつくっていく。自分たちの活動とは、そういうことだと思う。(2006年11月29日)

鍋谷美子(記録) 神戸YWCA 会員。介護職。越年越冬の炊き出しを経て2004年1月から夜回りに参加。以降、神戸や大阪で野宿している人に関わりつづける。現在、夜回り準備会の共同代表。

藤室玲治(司会・構成) 神戸YWCA 会友。神戸大学総合人間科学研究科に在籍。灘チャレンジの風刺劇企画をきっかけに2004年1月から夜回りに参加。村川・岸と同じ学生震災救援隊に所属。

⁴ 1983年に横浜で、十数人の中学生が山下公園他で寝ている3人の日雇労働者を襲撃して殺し、20人ほどに怪我をさせた事件があった。

⁵ 夜回り準備会では、工事などにもない、野宿している人が行政に「追い立て」られるときには、野宿している人と代替の住居などについて話し合うように行政に求めている。また若者による襲撃があったときには、教育委員会に対策を求める。また生活保護の手続きに際しては、福祉事務所への同行を行っている。



ワカモノと野宿

鍋谷美子（夜回り準備会）

野宿しているひとは、皆口を揃えて言う。「まさか自分がホームレスになるなんて、思ってもみなかった」。そのまさかの状況が、今若者の中でも広がりつつあると感じる。

かつてフリーターという言葉は、夢を追う若者が一定の期間のみ、いわば「仮初めの姿」としてアルバイト・パートタイムで働くことを指すと世間的には認識されていただろう。現在でも、フリーターは自由を好んで不安定な職に就いているというイメージは、抜けてはいないのではないだろうか（そもそもフリーターという言葉がそれを表している）。しかし、現実はどうか。

2005年度の派遣労働者が、原則自由化のはじまった1999年度に比べて2倍以上の約255万人になったという発表があった。派遣事業業界の売上高は増加しているが、逆に労働者の賃金は下落している。つまり、企業が利益をあげるために、いわゆる非正規雇用の利用が不可欠である現実があるということだ。これは、不安定就労の増加は社会構造が要請した結果であり、かつての日雇い労働者がそうであるように、非正規雇用は使い捨てにできる安価な労働力として、必要があって、つくられている労働形態であるということの表れである。

保障や、医療や、保険から遠ざけられた労働。私自身もそういった不安定な労働をしている。野宿している人たちと日々関わりながら、自分の不安定さとおっちゃんたちの不安定さは地続きであることを実感する。野宿も、フリーターも、決して自己責任などではなく、つくられて

いる状況であることを、ちゃんと認識しないといけない。

今の状況は、「若いだけが安全弁」であると思う。いくら技術があつたり、働けても、年齢が高いと雇ってくれないのだ。50、60代で一生涯懸命ハローワークに通い、落とされ続けるおっちゃんたちと、30代後半でなかなか安定した職に就けないひとたち、新卒でなければ正社員となるのは難しい20代の若者たちは今、同じ問題にぶちあたっている。

若者と野宿者が出会う、その接点に、襲撃もあげられる。いわゆる支援者の中には20代30代の若者も多く見られる。と同時に、野宿者を「襲撃」して殺してしまうのもまた、若者たちだ。私はその彼らが殺してしまう気持ちに共感はないが、彼らをそこに駆り立てるしんどさには、シンクロしてしまう。私がそれをしてしまっていたかもしれない、と思う。先が見えない、展望を感じられない、そういった若者たちが、もやもやしたしんどさを、“攻撃してもいい対象”である野宿者に向ける。本当はそこが対立すべきではなく、他に向けるべきところがあるのだが、やはり弱い者同士がたたかわされる現実がある。

ただ、野宿の状況を知り、支援しようという若者も少なからずいる。私は自分の状況を、感じるしんどさを、おっちゃんたちに重ね合わせ、日々関わっている。それぞれしんどさを抱えながら、若者は野宿しているひとと関わっているのだと思う。そういう意味では、そこにはつながり得る希望が、あると思うのだ。

今、知りたいことが出ている本

『 < 野宿者襲撃 > 論 』

生田 武志 著 人文書院 2005 年 12 月

戦後日本の青少年の殺人者率は下がり続けているにもかかわらず、数十年前から頻発する、少年らによる極めて残虐な暴行事件 野宿者襲撃。本書は、これまで数少ないルポでしか伝えられていなかった「野宿者襲撃」をはじめて包括的に論じたものである。進行する資本・国家・家族の変容をふまえつつ、若者の生の声を拾い、10代の今を鮮烈に描き出している。社会の偏見、少年少女を覆う日常のストレス、存在の不確実感……。「最悪の出会い」ともいえる襲撃を乗り越え、社会で居場所を失った2つの「ホーム」レス（野宿者/少年・少女）に連帯の道を開くにはどうすればよいのか。筆者の真摯な考察が光る。巻末には、著者が中高生に実際行っていた授業内容をもとにした、わかりやすい「野宿者問題の授業」が付いている。

（山本かえ子、夜回り準備会）

～目次から（抜粋）～

前編

- ・「人の命は大切」なのか？
- ・野宿者襲撃は「正義」だったのか？
- ・「90年代、少年犯罪は凶悪化した」のか？

後編

- ・野宿者襲撃の性質は変化しつつあるのか？
- ・アンケートに見る中学・高校生の野宿者への意識
- ・「1968年革命」と共同体の崩壊
- ・「学校内虐待=いじめ」と「学校外虐待=野宿者襲撃」と
- ・なぜ野宿者襲撃は思春期に特有な行為なのか？

終章 日本における「89年革命」とは何だったのか？

付録 野宿者問題の授業



2006 年をふりかえって

ちゃいやあらんど

佐藤 香織

たくさんの方に利用してもらい地域の方にもだいぶ知ってもらえたと思えるちゃいやあらんど。盛況な時は10組を超える親子が来られ、にぎやかだったが、春から幼稚園が始まり引越される方もいて、一時は1組2組の日や誰も来ない日も.....。

これからどうやって宣伝をするかと悩んでいる頃、利用者のお母さんからの口コミでと次々とベビーカーやスリングを使うような小さい子ども達が来てくれるようになった。どんな宣伝文句よりお母さんネットワークはすごい!とスタッフは感心しきり。

毎年恒例となったハロウィンパーティーでもお母さんネットワークの速さは活かされ、あっという間に定員オーバー。いつもより小さい子どもが多く、同じプログラムでは楽しめないかもとスタッフもミーティングを重ねた。でもそこは長年一緒に活動してきたメンバー。力の入れ具合、抜き具合は快適で、落ちつきすぎず焦りすぎず、自分達も楽しんで準備を進め今年のハロウィンパーティーも大成功をおさめた(はず)。

子どもが好きで同じ方向を向いてゆっくり進んでいけるちゃいやあらんどのメンバーと、これからは楽しい時間を過ごしたいと改めて感じた1年となった。来年も頑張るぞー。

わいわいデイルーム

橋本 静子

今年もメンバー、ボランティアとも出入りがありましたが、毎火曜日予定通りにデイルームを続けることが出来ました。メンバーの最高齢者は94歳になられましたが、この日を夢にまでみて待っていると仰って毎回元気なお顔を見せて下さり、私達ボランティアにとっても大きな喜びとなり、励ましになっています。

“生きがい対応型サービス”になってから、何人かの新しい参加者がありましたが、残念ながら長続きせず、それぞれの理由があったと思いますが、今の所、従来のメンバーで定着しています。当然の事乍ら出席出来なくなった方もあってメンバーは多少減っている現状です。段々体操も手仕事も限界がある事を知らされ、今後はプログラムに無理のないような知恵と工夫が必要な事を痛感しています。話し合いは一番何方にも参加していただける一時ですが、口を開かれる方は限られて来て、後の方は慎んで拝聴するという図式になるのが最近心にかかっている所です。話自体はボランティアにとっても初めて耳にする内容だったり楽しみの一つではありますが、一人一人の受け止め方を考えると、話し合いにも細かい配慮がいるのではないかと思います。

十年一日の如く変わらないのが良いという事もあります。私達も絶えず柔軟な姿勢で関わっ

て行くべきではと一年をふりかえって自問自答
するところです。

わいわい亭 村川 奈津美

私がわいわい亭に通い始めてはや 1 年が経とうとしている。クリスマスも近い冬の日我突然現れた小娘を、利用者の方もボランティアさんも温かく迎えてくれた。

桜満開の春の盛り、大きな変化が起こった。今まで 4 年間、わいわい亭の大きな支えとなっていたあるボランティア K さんが、ご家庭の事情で定期的に来ることが難しくなってしまったのだ。そしてちょうどそれに重なり、あるひとりの利用者さんが急逝された。

一番元気で、片づけを率先して手伝ったり、手先が器用でいろいろなものを作ったりもしてくださった方だった。ちょうどお葬式がわいわい亭の日と重なって、利用者さんのほとんどがお休みで、ひっそりとした分室で、涙ぐむ K さんの背中を、私は今でも覚えている。

それからまもなく「あとはあなたにまかせたからね」という言葉を残して去っていった K さん。気が付けば私はわいわい亭の看板娘になっていた。

あれから半年。利用者さんはそんな大きな変化にもかかわらず、来てくださっている。

わいわい亭の持ち味は、サービス提供者と利用者の境界が薄いことであると思う。ごはんを作る人と食べるだけの人といるけど、みんな分室にお昼ごはんを食べに来ている。ボランティアさんと利用者さんはお友達のようにだと、見ていてしみじみ思う。だから私も、みなさんの前

では親戚に囲まれた孫のような気分でいられる。

ちょっと連絡体制や情報共有がうまくいっていなかったりして、私や K さんみたいに毎回出られる特定のメンバーがいないうちにミスが起こるのが難点ではあるのだけど（苦笑）このわきあいあいとした雰囲気は保っていきたい。

私ももうすぐ 4 回生。平日昼間のわいわい亭への参加は難しくなるのかもしれないけれど、なんとかして来るようにしたい。私もわいわい亭の今の雰囲気が大好きだから。

子育て支援プロジェクト 斎藤 明子

子育て中のお母さん、お父さんそしてその子供を社会のみんなで支援していこう、というコンセプトの下、いろいろなしかけを考え実行してきました。昨年度は NP 講座（完璧な親を目指さなくてもいい、肩の力を抜いて自分らしく）をやりました。

残念なことに今年度は動ける会員が少なく、冬眠中。けれども志は持ち続けています。子供も親もなんだか生きにくい今の社会、今こそ子プロの活動どきだという強い思いがあるので。次に子プロがどうはじけるか、乞うご期待！はじけた時はぜひご支援、ご参加を！

わいわいランチ 井上 瑛子

分室でのわいわいランチ、今年で 6 年目に入りますが春から異変が起こっています。4 月の介護保険の改正で高齢者に対するの対応が厳しく

なったのか配食数が少しずつ増えてきて現在では五割強まだまだ利用者のご希望がありますが、現段階では対応に限界がありご希望にお答えするのが難しくなっています。又今年度から新たに会食サービスとして金曜食事が始まりました。なつかしい仲間も加わり行政の配食助成金が減額されるなか大いに助けられています。高齢者対象の地域活動が根付いてきているなか行政が認めて頂けたらとの思いです。

月曜日から金曜日までの分室での活動、朝 9 時前から始まりそれはそれは活気ある一日が始まります。曜日によりお届けするお宅が違い、回る順番も違いお昼に間に合うように届けたいので「11 時には出発したい！」と号令が何処からか掛け、あちらこちらから手が出て手際よく見事に準備が出来ていきます。食事内容は高齢のためお肉、油濃い物が駄目な方には調理担当者が別メニューで作り、時間指定も出来る限り努力して届けています。一人住まいの方の安否、障害がある方には個々にきめ細やかな対応をしています。さすが YWCA です。ここまでの話だと完璧、でも今年も失敗は相変わらずあり味噌汁が 1 つ足らなかったり 1 軒だけにおかず一品入れ忘れてたりとご迷惑をお掛けしたり今はボランティアの人達皆でチェックしてミスが無い様に楽しくがんばっていますが常にボランティア不足です。

最後になりましたが 4 月からお誕生日の方に可愛いお誕生日カードとお赤飯をお届けしています。皆様とても喜んで「カード嬉しいです」と言っています。このカードは手作り、以前一緒に活動して下さった方が自宅療養をされていて少しお元気になられご自宅からの参加ご協力してくださっています。何時か又

ご一緒出来る日を願っています。

弓の木歌の集い

橋本 静子

灘区弓ノ木南市営住宅の高齢者の集い「むつみの会」でこの歌の集いが始まってから 7 年になります。阪神大震災後の仮設住宅での YW との関係がそもそものきっかけで 99 年に「むつみの会」の方から御依頼を受けて出向く事になりました。私達 (YW から二人が参加) も七つ年を重ねた事になりますし、参加されていた方達も当然高齢化が進み、亡くなられた方、ご入院やお具合が悪くて出席不可能な方達もあり、此の先新たに加わって下さる方もあまり期待出来ない現状ではありますが、とも角、月一度第 3 水曜日の午後に開かれるこの集いが 7 年間続いて来た事を改めて振り返り感謝しています。この間に参加されている皆様 (5、6 名) とはすっかりお馴染みになり、毎回懐かしい歌を歌ったり、歌にまつわるおしゃべりをしたりの楽しい一時を過ごしています。多少歌の数が増え、時の話題は社会情勢を反映して変る事があっても 7 年前と今とあまり変りない内容の集りですが、今や、昔を語り合える仲間も場所も限られて来ましたから、この集いは私達にとっても貴重な一時となっています。ただこの 3 ヶ月は住宅の水道工事のため集会所が使えなくて、止むを得ず休会しています。次回は 2 月になりますが、その日の再会が待たれる此の頃です。



夜回り準備会 野々村 耀

夜回り活動自体は例年通りですが、野宿している人の状況は変わりつつあります。

今年になって「ワーキングプア」という言葉を耳にするようになりました。働いているが生活保護以下の収入しかない人々のことです。中曽根内閣以来の、規制緩和政策が働いても働いても安定した生活の出来ない人を大量に生み出しました。若い「非正規雇用」の労働者は、野宿生活予備軍といえます。

夜回りのとき、寝ている人から時々「野宿する人が増えているだろう」と聞かれます。神戸市の調査でも、神戸の冬を支える会の調査でも、野宿している人数は減ったとでているのに、野宿している人の実感は違う、なぜなのか考えていました。

先日、夜回りで出会った方に「どこから来たの」か聞くと、神崎川の方だという。アルミ缶などが資源ごみとされ、回収方法が整備（第3水曜日など）されると、それを集めて暮らしている人は、資源ごみの日を追って、今日はこちら、明日はあちらと移動せざるを得なくなります。実際には野宿する人数が増えても、同じ場所で寝ていないので、統計に出なくなっただけです。

野宿している人への追立ては、大阪が突出していますが、神戸では公園を改修すると、寝られる場所がほとんどなくなっています。襲撃も後を絶ちません。

そらとぶうさぎ 吉川 直子

今年のそらとぶうさぎは、子どもたちが大きくなってきたこともあり、外出のプログラムが多い年でした。花見、須磨水族園、王子動物園、秋の収穫祭（愛農人の方と一緒に）など色々なところへ出かけて行きました。思い入れの深い分室での活動では、かき氷作り、クリスマス会などのプログラムがありました。また、今年は嬉しいニュースがあり、参加者さんとボランティアに新しい命が誕生しました。ちいさなかわいらしい笑顔も増え、ますます笑顔の絶えない1年でした。

また、2006年は、そらとぶうさぎが活動を始めて5年目の年です。家庭訪問での活動から始まり、3家族限定の分室での開放スペースの形になり、外出することが増え、少しずつ形が変わってきた様に思います。しかし、そらとぶうさぎの思いは変わらず、しょうがいをもつ子どもとその家族が地域でいきいきと生活できるように、そして、一生懸命がんばっている子ども達やお母さんが、ちょっと一息ついて休める様な場となれる様に、との思いで活動をしています。ただ、やはり、歩んできた道は平らな一本道ではなく、つまづきながら、振り返りながら、一歩ずつ歩んできた様に思います。そんな私達の活動を振り返り、これからの参加者さんとのかわり方やそらとぶうさぎのこれからの方向を考えたいと思い、報告書を作る事にしました。皆さんにも読んでいただき、色々教えていただけたらと思っています。

あの人に会いたい！

わいわいランチ・わいわい亭 増田征子さん

ここでは毎号一人、神戸 YWCA 地域活動委員会で活動している会員・会友・ボランティアを紹介していきます。

現在取り組んでおられる活動は？

分室で行われているわいわいランチとわいわい亭に参加しています。

わいわいランチは毎日型の配食サービスです。一日約 30 食をお配りしていますが YWCA の配食サービスは極め細やかさが特徴です。利用者さんの好みや、食べやすい形をお聞きしてご希望に応じたものを提供しています。また、お味噌汁なども温かいものをお届けし、お体の不自由な方にはすぐに食べていただけるように食卓に準備もします。わいわい亭は週に 1 度の会食サービスで、毎週水曜のお昼時に分室でやっています。

YWCA（以下 Y と省略）の活動に参加されるようになったきっかけは？

阪神淡路大震災ですね。Y は震災翌日から駐車場で炊き出しを始めましたが、その後 Y まで来られない身体の不自由な方や高齢の一人暮らしの方に無料の配食サービスを始めました。私も東灘区で被災して Y のすぐ近くに引っ越してきたことがご縁で、その頃からお手伝いしていますのでかれこれ 10 年になりますね。

活動の中で印象に残っている出来事はどんなことですか？

配食サービスは高齢の方が対象ですから、お届けした際に日常生活のお手伝いをすることがあります。例えば、車椅子の方でトイレトペーパーの交換が出来なくて頼まれたりして、元気な者にはわからない高齢の方の暮らしぶりに、年をとることのつらさを感じます。

また、利用者さんが施設にはいられたり、昨日まで元気にお世話されていた介護者さんが亡くなったりされたこともあります。そんな時は大変寂しい思いをしました。

嬉しかった一番の思い出は、じっとベッドに休まれている天井を眺めているだけの方に初めてお弁当をお届けした時のことです。いわれるとおりにお弁当を置き、お金を頂いて帰ったのですが、翌日同じ状態で休まれている方の横にお弁当の空箱と、「お弁当に感謝」とたどたどしく書かれたメモが置かれていました。何もおっしゃらないけれど、喜んでいただけたのだと本当に嬉しかったです。今でもはっきり覚えています。

現場で感じられていることから、介護保険制度にご意見はありますか？

制度が改正になり、配食サービスの需要が急に増えました。今までならヘルパーさんによってもらっていた方が、要支援になり配食サービスに頼らざるを得なくなったということです。配食サービスを利用されている方は一人暮らしの方も多く、十分なサービスを受けられていないと感じることが多いです。時には私たちから相談員に何度も働きかけて、介護保険サービスを導入したケースもあります。

制度を作る中で、先の見通しの甘さも問題だと思いますよ。改正により受けられていたサービスが取り上げられては、たまったものではありません。

私達の配食サービスへの助成金も減らされていく一方です。私達はボランティア活動で行っているからこそ、利用者中心のサービスができていますが、活動を続けていく上で資金不足は常に大きな問題です。現に存続できなくなったボランティア団体が多数あります。人が尊厳を持って生き続けるための保障をしっかりとっていただきたいと思います。

最後に若い会員に向けてのメッセージを

現在配食サービスを行うボランティアは60歳代が中心です。私達の意志をついで活動を担ってくれる人材がありません。Yでは20～30歳代の若い会員さんの活動が盛んになってきたのでとても頼もしく感じています。でも、皆さん仕事や家庭があって忙しそう。丁度私たちとの中間になる40～50歳代の活躍に期待したいです。



インタビューを終えて

震災後もうすぐ12年を迎えようとしています。震災の年に生まれた娘は小学6年になります。その命の成長を物指しにして見た時、わいわいランチの活動の歴史にただただ頭が下がります。業者が行う配食サービスを私は仕事柄目にしますが、Yのように一人一人の利用者を大切にされている場面に出会ったことはありません。事業で行うサービスには限界があるということなのでしょう。だからこそYのようなボランティアによる活動が大切なのだと声を大にして伝えたいのです。暖かなお弁当を橋渡しに高齢の方の幸せな笑顔がこれからも続くように……。どうかお一人でも多くの支援をよろしくお願いいたします。

インタビューア－：青木 容子

“ 日帰りバスツアーに参加して ”

わいわいランチ・ボランティア 小野博詳

2007年11月5日(日) 日頃の行いがよいからか?晴天に恵まれ友人のボランティアの青柳さん、現役時の上司(元神戸通信病院 総務課)である花原さんの三羽鳥、と各ボランティア、Yの皆さんとともに三宮バスターミナルを陶芸美術館に向け出発した。途中、麒麟麦酒工場に立ち寄り工場内見学としゃれ込んだ。私はもともと設備関係が好きなので案内状の先導で「ナールホド・フムフム・フンフン」とまじめに見学、関心と相なりました。その後試飲会となり自分の試飲券を飲み乾し、他の方から「この券どうぞ!」と差し出された試飲券をもいただき早くも酒盛りとなりました。

適当に切り上げ目的地に向け車中の人となりましたがバスに揺られて試飲があとでよくきいてきました。目的の陶芸美術館に着いたが入館せずに早速昼食?にすることにしレスト



ラン近くのウッドデッキに陣取りました。太陽が真上より注ぎ、熱いくらいで日焼けを気にする女性方が続出する中での又、又酒盛りが始まりました。

その後「人と自然の博物館」に着き、グループ別ごとに行動しペットボトルの数当てや、売店での樽酒等を楽しみ、現地での時間はまたたく間に過ぎ八夕!と気が付くと帰りのバス中でありました。

帰りは青柳さん発案、製作、指導の「ハゴ板」ゲームを楽しみながら、本日一日行動を反省、次回の予定等を考える内にバスは進み 神戸の人になりました。

本日は皆様本当にありがとうございました。次回もぜひ誘ってください。

【編集後記】神戸YWCA 地域活動委員会の「わいわい通信」9号をお届けします。今回の特集は「野宿している人と私たち」です。この特集のための座談会が個人的には一番面白かったです。神戸YWCAで野宿の問題に日常的に取り組んでいるのは、全体から見ればごく一部の人間なので、普段は野宿の問題に関わっていない神戸YWCA 会員・職員が、野宿している人や「夜回り準備会」のことをどう見ているのか非常に気になっていましたが、いろいろ話げてきて少し安心しました。また座談会では記事にした以外のこと——「夜回り準備会」の活動は野宿者にどう役立っているのか、野宿している人は「居宅」になれば幸せになるのか?——なども率直に話し合えて、得るものが多くありました。紙面の都合でそのすべてを紹介できないのが残念です。みなさんからのご感想もぜひお寄せ下さい。(夜回り準備会・藤室 玲治)



ありがとうございました！！

地域活動委員会へのご寄付等ご協力下さった方々。(順不同・敬称略)

鈴木 貴子 清水 純子 松本 博子
篠崎 八恵子 辛島 道子 大杉 美耶子
中田 紀世子 安楽 弥寿子 東洋英和女学院中高部
広島女学院大学学生・教職員一同

皆様のご支援に心から感謝申し上げます。

*万が一お名前がもれています場合にはご一報いただけましたら幸いです。

今後も私どもの活動にご支援・ご協力いただけると嬉しいです。

お知らせ

地域活動委員会より

- ・ 秋の交流バスツアーに行ってきました。
- ・ ペンダントを作りました。

各グループより

- | | |
|--|----------|
| ・ トーンチャイム貸し出します。(応相談) | ちゃいやあらんど |
| ・ 報告書を作成しました。HP から見られます。 | 夜回り準備会 |
| ・ お米を募集しています。 | 夜回り準備会 |
| ・ 空きスペースを探しています。 | |
| 灘区、中央区近辺で、カンパしていただいた物を
保管できるような場所を探しています。 | 夜回り準備会 |
| ・ 報告書を作ります。 | そらとぶうさぎ |